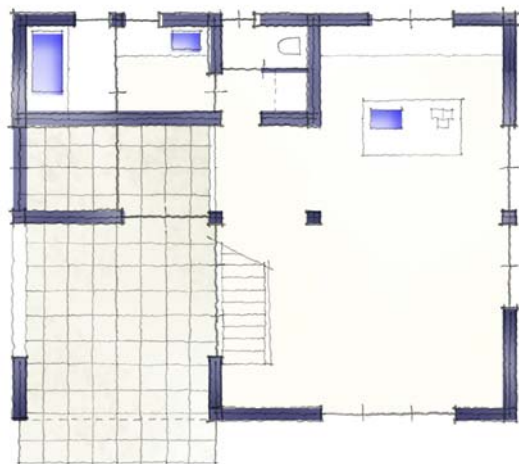
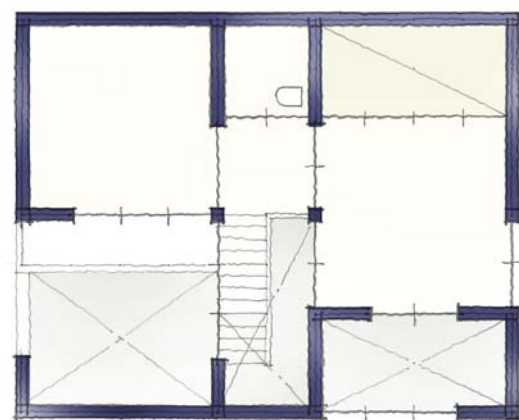




星
舎



1 F



2 F

東西5間（約9m）、南北4間（約7m）、延面積35坪（115㎡）の住宅としてはもっとも標準的な切妻・大屋根形状の中に、デザイン空間を配置しました。東西の立面は正に「舎」の文字をそのまま象徴させています。しかも建物でもっとも大切である構造材を、活かし露わすことをデザインの要素としています。さらに全体空間の中に日本住宅の縁側の機能を、立体的に織り込んだ空間構成に挑戦しました。屋根に切り抜かれた窓により、外観には見えないバルコニーと1階土間、2階居室に外部環境を取り込みます。まさに夜景では家の中全体に星を宿す家となります。





シンプルさの求め方を、最も根源的な所に求めてみた。例えば外装や窓やインテリアといった、将来的にも改装できる部位・部品をシンプルにするデザインではない。住宅というものが建って存在するのは構造体があるからである。その架構にシンプルを求め、かつ現し、その上で魅力ある空間を内に含むデザインに挑戦した。空間の豊かさの象徴として日本住宅の持つ「縁」を拡大させることで、空を小屋裏から土間まで呼び込んでいる。平面形状は4間(約7m)×5間(約9m)の単純矩形でわかりやすく、素人でも想像しやすい。さらに大屋根に加えて、階段が2階の中心部上がることで、2階の動線計画を最も単純化している。それでいて、断面的にはプロの設計として、解放感と奥行きのある空間をつくり、その活用に創造性を持たせることで、住まい手の個性が表現できる余地とした。まるで星をつないで星座を考えるような、想像性をも発揮させる。

飽きることのない古民家の単純な木組みを尊重し、限られた架構の中での空間作りを行なうことは、将来の改築を先取り検証することでもある。「舎」の象形文字にも似た形状の中での、空間デザインとしての可能性に挑戦することがひとつの目標であった。住宅を象徴する「舎」の形そのままに、日本住宅の縁側の機能を立体的に織り込んだ空間構成の家。夜空の星を宿す間が随所に配置されています。

デザインの再元性 大垣建築モデルハウス

